

「日乗上人日記」考

——元祿期言語生活の一面——

野地潤家

一

芭蕉の「嵯峨日記」の元祿四年卯月廿二日の条には、朝の間雨降。けふは人もなく、さびしきまゝにむだ書してあそぶ。其ことば、

喪に居る者は悲をあるじとし、酒を飲ものはを樂あるじとす。

「さびしきなくばうからまし」と西上人のよみ侍るは、さびしき(を)をあるじなるべし。又よめる、

山里にこは又誰をよぶこ鳥独すまむとおもひしものを

独住ほどおもしろきはなし。長嘯隱士の曰、「客は半日の閑を得れば、あるじは半日の閑をうしなふ」と。素堂此言葉を常にあはれぶ。予も又、

うき我をさびしがらせよかんどり

とは、ある寺に独居て云し句なり。

暮方去来より消息ス。

乙州が武江より歸り侍るとて、旧友・門人の消息共あまた届。其内曲水状ニ、予が住捨し芭蕉庵の旧き跡ふる尋て、宗波に逢由。

昔誰小鍋洗しすみれ艸

又いふ、

「我が住所、弓杖ニ長計にして、楓一本より外は青き色を見ず」と書て、

若楓茶色になるも一盛

嵐雪が文ニ、

狗背の塵にえらるゝ蘇哉

出替りや稚ごゝろに物哀

其外の文共、哀なる事、なつかしき事のみ多し。(日本古典文学大系「芭蕉文集」、一〇四—一〇五べ)

と記してある。落柿舎にあって、芭蕉がひとり清閑と寂寥とにひたつて、「さびしきまゝにむだ書」きをしてあそんだこと、暮れがたに、前日(廿一日)京に帰った去来から消息がとどき、さらに、旧友・門人の消息があまた届けられたことが記されて、そこには俳諧の道にはいつていた芭蕉の風雅をむねとする生活の一面がうかがわれる。

これに対して、日乗上人の日記の、元祿四年四月廿二日の条には、

庵勤如常、礼法華一座、壽量品一返、性師へ廻向。

講主招請したてまつる。坊衆不残請ス。鉢持して食法如法也。講主も鉢ヲ行セ給ふ。齋過後後講主へまいる。白銀毳兩たいまつる。能生あしむすハみな布施の式也。

日中出仕、晚課出仕、観も設非時請坊衆、講主も御出ありし。立塔婆誦経し侍る。仏前誦経、講主導師、十如、壽量品、神力品也。今師の事おもひて

なき人をわするゝとしもなければどもとおく月日のなるぞかなしき蓮花寺よりせうそ来る。昨日谷氏へまいりしに色々の望あり、中にも大居士を一得に付て給ハれと、皆如に申され□□来る。大居士号くるしからず候はゞ遣んやと申来る。大居士の事、一國の高士ならではとおほへぬれど、先其あいだに承り置てんと申遣し。(常陸久昌寺藏、稻垣國三郎編「日乘上人日記」、昭和29年7月31日、日乘上人日記行会刊、五五―五六へ)

とあり、雨の一日をひとり自在にすごした芭蕉とはちがって、仏事にすごしたかなり多忙な有様が述べられている。朝夕の勤行がきびしくなされるのはもとよりとして、法式に則てなされる仏事を勤め、寺院・衆坊のもろもろの対人關係をもさばいていかなくはならぬ。そこには、浮世をはなれつつ、なお複雑な奥務についていなければならぬ、篤実な僧侶の日常生活が見いだされる。亡き師日性上人のことを思いおこして、歌一首をつくるたしなみとゆとりとはあっても、俳諧のみに生きようとした芭蕉とは、おのずからうちこみかたがちがっている。日乘上人は、和歌の世界に遊びうる、風流を解する教養人ではあったが、上人にとつての

一筋の道とは、「朝課如例、庵勤又如常、」に始まり、「晚課如常出仕、庵勤如常。」(たとえば、元祿四年一月三十日の条)に見られるような、ゆるぎのない祈念の世界での安住であった。それは、朝課・庵勤→晚課・庵勤という、一日一日の生活様式ともなっていた。

日乘上人へも、消息は届けられ、上人みずからも、たえず多くの消息をしたためつかわすのであったが、それらは概ね芭蕉のばあいの風雅中心のものとはちがって、もっと実生活に即したものであった。

二

つぎに、「嵯峨日記」の四月廿六・廿七日の条には、

廿六日

芽出しより二葉に茂る柿ノ實 史邦

島の鹽にかゝる卯の花 蕉

蝸牛頼母しげなき角振て 去

人の汲間を釣瓶待也 丈

有明に三度飛脚の行哉らん 乙

廿七日

人不来、終日得閑。(同上書、一〇八へ)

とのみあって、簡明に記されている。これに比べると、日乘上人の同じ日の日記は、左のように記されている。

二十六日 辛 晴 午後雨

(前略)

雨いたく降る。晚課ハ友次居給ふ故不出、庵勤如常。塩崎十左衛

門来ル。

一晚課過て真了院殿山のかみへ、御仏事に付て来宿のよし。さらによりてまいる。行事へ申す。雨ふれば力者たのみてゆく。たいめん給はる。ねもごろに仰らる。予も菓子やうの物もてゆく。及暮帰る。いつもハ入相のかね前にかへる也。

御城たかを殿より菓子、左近殿よりもつてし結ふ。みなみどのたばこ、きせる、真了院どのよりたばこ箱来る。鞆負殿よりまんぢう箱来る。□□院殿より同断。庵に非時師來。唯妙玄義の□□の給ひ遣さる。宣妙を遣し給ふ也。夕べの二道のふみ此使に遣し。てけよくなる。

二十七日 壬 晴

勤行如常、日中不出、谷氏来山故断行事。真了院殿參詣、西の間に設座。

辰ノ上ニ法事始ル。讀鉢利、鏡入、禮札^兼散華入。対揚鞆、維那^兼如、導師祝上人也。誦經壽量品、磬は縁也。牌位に備膳、代參衆もありし。御蓮枝方よりはなくて、其のよの衆斗也。庵にて設齋、如法食法也。午前ニ真了院殿帰り給ふ。田山等へ替状遣ス。

今日より谷氏來詣、一得覺靈墓所見に人多来りて、御墓の西の方の山也。日の内に出来て納骨有。明静庵にて誦經それより坊中皆々墓所にて、自我偶誦スる事半時斗。其間に骨を納ム。重箭焼香拜、家人等も焼香拜、日暮るゝまで谷氏庵にて物語りし給ふ。晚課出仕。庵勤如常。

今日午後加藤四郎左衛門御普請の奉行として居給へるに、田宿といふ所に居住せられしにゆく。菓子箱^兼つ遣ス。則出で、御祈禱の事悦べるよし也。歸りて後せうそこせし。布施皆々遣ス。風呂あ

り。(同上「日乘上人日記」、五七と五八へ)

「嵯峨日記」の四月廿六日の条に、ただ連句が五つ並べてあるのは、俳諧に生きた芭蕉の日常生活において、連句がどんなに重かつたかを、かえつてよくものがたっている。また、廿七日の条に「人來、終日得閑。」とのみあるのも、芭蕉がどういふ境地にあつたかを、的確に述べていて、これはもちろん、世のつねの日常性を示すものではない。

日乘上人は、二十六日の条において、「雨いたく降る。——雨ふれば力者たのみてゆく。——てけよくなる。」と記している。末尾に、「てけよくなる。」と置かれているのは印象的である。日乘上人は、元祿四年一月二十四日、「土佐日記のうつしを終日見てくらしぬ。」(同上「日乘上人日記」、一三三)と記している。「てけ」がそこから採り用いられたかどうかは、にわかには断ずることができない。

また、日乘上人は、二十六日の条に、「たいめん給はる。ねもごろに仰らる。」と記している。僧侶として、対人・対面の生活の連続であつただけ、対面してのことばのやりとりについては、自然敏感になつていて、たとえ「ねもごろ」ととらえているのである。元祿四年四月十七日の条には、

十七日 壬 陰

勤行如常、自我偶、権現神儀、日中出仕。

今日、水戸のまつりにて此山へも人多くよつてらうかはし。

誦誦三四五六七八經。

申ノ上ニ西山の御殿拜見ニ行、手代金左衛門ニあふ。此山より三丁ほどあらん。御殿のやう、わらやの軒いとかるく見へし。及暮

歸る。行軍當番に断いふ。依之、勤行不出、庵勤如常。

今日、自入、慈教、川井へゆく。黄昏前といふて行しにくれて歸る。かへりても断なし。さるによつて兩僧をすこしいさめんとおもひし。(同上「日乗上人日記」、五二―五三、傍線は引用者。)

と述べてある。日乗上人みずからは、行軍當番に「ことわり」を言つて勤行を休み、暮れて帰り、「ことわり」もない兩僧(自入・慈教)には、「すこしいさめんとおも」う。此山へも人多くよつて「らうかはし」と感ずるところに、上人の感じかたが見られる。

ともあれ、日乗上人の多忙な日常生活と対比すれば、芭蕉の静閑・風雅に遊ぶ生活の独自のすがたは、いっそう明白となる。

三

さらに、「嵯峨日記」の四月廿九日・晦日の条には、

廿九日 一人一首奥州高籠ノ詩ヲ見ル。

晦日 高籠聳天星似胃、衣川通海月如弓。其地風景聊以不叶。

古人といへ共、不至其地時は、不叶其景。

とある。これに比べ、日乗上人の同じ四月晦日の日記には、「晦日乙酉 雨」とあつて、当日行なわれた法事・墓参のことを述べ、のち、つぎのように和歌が挙げられている。

此ほど谷氏によめるうた共、かたられしを書つくる。

ほととぎす

まぢろ／＼て今宵もふけぬ有明のつれなくてやは山ほととぎす
ほととぎすなきこそわたれつく／＼とむかひの岡の夕暮の空

九月十三日中山道軒のたちへ中納言公御成序に

こゝろしてありしもすさめ長月の今宵は雲の塵もすゑしと

旅宿の鹿

軒ちかきしかのなくねにねぎめしておもへば今宵秋の山里
又ふるき歌の物がたりせしに、ある集のうち、

なにとなく入江の夕べきて見ればみのと笠とぞ舟にのこれる
さびしきていなり。

さつま守たゞのりの歌に浦千鳥

さよふけて月かげさびし玉の浦のはなれ小島に千鳥なくなり

此歌さびしくさむきやうなる歌のてい也。

谷氏へつかはしける歌

わが山の本太姉の御せうと、谷氏の老禪門かくれ給ひける比、
孝子重箭此山にこもりおはして僧たち供養し、後のわざとり

行ひ給ふ。まことに山もうごき出ぬべし。比しも卯月の末つか

たおりしりかほに、ほととぎすのうちしきりなくも、いとゞあ
はれに覺へて

たらちねのわかれや知りてほととぎすなくねをそふる深山辺の里
午後暮よりすぐに旅の宿にかへられしが、あるじにことづてゝ返
しし給へり。

うら山へなきからにさへ今日は又わかるゝ山になくほととぎす

あはれおほへし也。

このほど唯妙師を支講の再讀しかるべきとて、江戸へ講主より
の給ひ遣さる序に

すみなれし昔を今もわすれずば立帰り鳴け山ほととぎす

今日なんおもひいでゝ書付る。(同上「日乗上人日記」、五八―
五九べ)

芭蕉が漢詩(「本朝一人一首」)を見たり、それを日記に抄出して

いるとき、日乘上人は、谷小左衛門重箭の詠歌を録し、また、谷氏へ歌を贈り、その返しを得ているのである。上人の詞書に、「谷氏の老禪門かくれ給ひける比」とあるのは、谷重箭の父、谷一得（光圀の生母久昌院八谷久子Vの兄）が元祿四年四月十七日に、九十三歳をもって卒したのを指している。

日乘上人の和歌の贈答については、その「日記」の随処に記録されている。歌いぶりは、むしろ平明・率直であって、曲折に乏しいうらみもなしとしない。

上人の社交生活において、和歌の贈答が一つの座を占めていたことは、やはり注目される。

- 日乘上人の言語生活には、
- I 読経・誦経——読むこと。
 - II 法話・法談——説くこと。
 - III 和歌の贈答——詠むこと。
 - IV 物語・座談——話すこと。
（たとえば、「やゝ物語して帰られし。」（八元祿四年五月三日の条V）
 - V 消息・ふみ——書くこと。
（たとえば、「明日なん江戸に飛脚やらんとて、ふみ多かく。」（八元祿四年五月九日の条V）
 - VI 記録・日記——書くこと。
 - VII 物語・説話——読むこと。
- などの領域が見られ、かなり多様である。（上人は、漢詩の指導をも、光圀公から受けている。）

四

さて 芭蕉の落柿舎を去った日、元祿四年五月五日、日乘上人は

その日の日記を、つぎのように記している。

五日 庚寅 晴

朝課出仕、維那勤ム。勤行如常、壽盃、神力品、壽盃品、性善院靈へ。

今日ハあやめ、よもぎ佛ニたいまつる。加茂のまつり・くらべ馬などおもひ出づる。

首座十坊祝儀とて来られし。

御代拝衆、巳の刻、中将公御代拝、太田原伝内長はかま。季姫君御代拝、武藤林右衛門長はかま。川津権右衛門よりせうそこせし。初瓜、初茄子、從中将公御献上とて持てこせし。則返誓遣ス。如例御牌前に奉る。自我偶坊衆出仕。このうり、なすびを講主へもたてまつる。又、ちいさくして十坊衆へ分けて、みなく初めての物としてしやうばんせり。日中出仕。

いなぎ庄屋、組かしら惣右衛門来ル。さる田七郎右衛門来る。物こせり。つねく断いへどなを物おこせる事、うたてさかぎりなけれど、かへし侍るも心をやぶるやうなれば受けぬ。かさねては文しいはんや、またつかいにて物こさぬ前に申てんとぞおぼゆる。講主、首座、坊衆へゆく。会津へ義住に状たのむ。省上人、惠忍、大法寺等也。会津燭燭義住にたのむ。金毘両遣ス。くんずニツたのむ也。

今日よみし歌

おのづからふかねどあふぐあやめ草軒端にかほるよもぎふの宿
義住明日会津へゆくとして、いとまごひして帰られし。おもひ出る。

君がゆく時しもあやなあやめ草たゞわかぬる袖ぞ露けき
□□□□を枯こそなけれあやめ草たゞかりそめのわかれとおも

へど

晩課出仕、勤行如常。(同上「日乗上人日記」六一―六三ペ)

慶安六年十一月十八日、京都に生まれ、年少のころから深草の元政上人に師事した日乗上人は、五月五日を迎えて、「加茂のまつり、くらべ、馬などおもひ出づる。」と述べている。中将公(水戸藩三代綱条)からの献上品である、初瓜・初茄子を、初物として、分けあい、賞味しているのも、「あやめ」・「よもぎ」を仏に供え、さらには、それらに因んで歌を詠んでいるのも、五月五日にふさわしい。

翌五月六日、上人はさらに、「今日おもひよりし歌誓いて見る」とて、

郭公一声

一こゑをうらみもはてし郭公きかで過にしほどもありしを
一こゑもきくはうれしきほととぎす待し心におもひくらべて(同上
上「日乗上人日記」、六三ペ)

の二首を録している。ここには、日乗上人の和歌詠出の自然さ、巧まぬ歌いぶりが見られる。

さて、五日の日録のうち、「物こそり。つねふ断いへどなを物
おこせる事、うたてさかぎりなけれど、かへし侍るも心をやぶるや
うなければ受けぬ。かさねては文していはんや、またつかいにても
物こさぬ前に申てんとぞおぼゆる。」とあるのは、日乗上人の潔癖
さ・心づかいのこまやかさを、よく示している。寺院の生活では、
多くの人々からさまざまなものを贈られることが多く、それらに
ついてのメモも、上人の「日記」中、随処に見られる。そういうも
のを受ける側の上人が、無造作にかつ無分別に受けていたのでない

ことは、右の例によっても知られるのである。

五

なお、日乗上人の日記を見ていくと、つぎのような記述に出会う。

1 今日もかけひの水なをやまずおち侍り、いつも一日など雨ふりた
るとて、かほどは水落侍らぬに、つもりし雪氷などの雨にてとけけ
るにこそ、かくおゝくの水のおつるにこそと思ひ侍る。元祿四年
一月十九日 「日記」九ペ

2 恩のいはく、今当寺繁昌せる世のつねのごとくにきらめけるにも
あらで、修徳興立の習ひはかくのごとくの作法いみじき事、まこ
とのさかへとおぼゆる。など申されし。志のすなをなる人の申す
ことはひとこともかんぜられ侍る。元祿四年一月三十日「日記」
一五―一六ペ

3 表具師歌兵衛、わかな、セリなど袖にし来れり。元祿四年二月三
日「日記」一九ペ

4 さるによつて暮に及で太田へゆく。道にて留なり雨ふりていぶせ
し。西ノ刻斗に御殿へまいる。元祿四年二月十三日「日記」一三ペ

5 つくばの見ゆる。今日ハ風もなくてけよくてうれし。普門品十
二巻こしの内に誦ス。元祿四年二月二十三日「日記」二八ペ

6 二十四日 庚 晴 午後風
勤行興の内にて如例。自我偈天台大師恩徳、普門品三巻外に誦ス。
夜明て土うらを出る。つくばねいまだ見ゆる。

きぬ川渡るとて

きしおふる松の下枝に水たへていく代かかけし鬼奴川の浪
藤しろにて風の休す。こゝも水わろくてくるし。とりでの舟にの

る。風はげしくて舟あやうし。あびこといふ所にてハなを風やまず。力者もゆきまどふ。ちり吹きたててもあけられず、こがねちかくなりて風おさまる。日暮にこがねにつく。作兵衛といふ者の所に宿る。勤行如例。元禄四年二月二十四日「日記」二八べ

7 未ノ刻斗に蜘蛛下りて戸の上にかゝる。則慈吉トリテ□□ニナゲル。元禄四年二月三十日「日記」三一べ

8 □□□刻ニ蜘蛛下りて□にかゝる。則床ノ上ニヲク。元禄四年三月二日「日記」三四べ

9 人見氏へ行んと出たつに、ざしきの入口にて蜘蛛下る。則床の前におく。元禄四年三月十一日「日記」三七べ

10 初夜の比、蜘蛛かゝる。元禄四年五月二十六日「日記」七〇べ

11 今日御前にて御物がたり申す内に蜘蛛くだる。予が衣の上にかゝる也。元禄四年八月二十一日「日記」九六べ

12 日の出る比江戸を出る。屋内にて院羅尼品一返、鬼子母神法樂、外に普門三返。いつかまた江戸にいづべきとおもふに、命もしれずなごりおしくおぼへて、池のはたをゆくに、うちかすみて上野の方も見へず。元禄四年三月二十八日「日記」四八べ

13 今日こゝちなやましけれどおして勤メ侍ル。しやうゆふのむぎにる。かしがまし。今日こゝちなやましきは、よんべ新しき麦のい

ひくひたる故也とおぼへし。かかねていのちながらへてあらば心得べき事也とて書付ル。元禄四年六月二十一日「日記」七五べ

14 久しく雨ふらで、蓮の池水かれ、かけひの音絶たり。水すくなくて物うし。つねに用ふる瀉の水も少くなれるよし申セバ、今日より入やといて蓮池に水くみ入などする也。元禄四年七月二十日

「日記」八三べ

15 勤行如常。今朝は鶯春のごとくなく。おもしろき事也。元禄四年二月二十一日「日記」八三べ

以上、いずれも、上人の「日記」からの抄出であるが、そこには日常生活のさまざまのことがとりあげられていた。その時その折のこともが、実感をこめて述べられており、それが日乗上人の生活感覚の、凡ではなかったことを示している。

蜘蛛のことがしばしば出てくるのも、印象に残る。上江戸・鎌江戸の際の紀行の部分もいきいきと述べられている。これらの言いまわしには、芭蕉の文章表現に近いものをも見いだされるのである。

六

日乗上人の「日記」には、水戸義公（光圀）のことがしばしば出てくる。光圀公は、元禄三年の冬、「致仕して常陸に帰り、直ちに西山の地（久昌寺裏）を相して、山荘の造営に着手し、その竣成を待って」、元禄四年の五月九日に移居したという。それからの上人は、「殆んど毎日のように山路を往復して、事大小となく、老公の意見を求め、或は懸問となり、或は法話もし、殆んど寸暇もない生活であった。」（以上、同上「日記」所収、「日乗上人伝」による。

二べ）日乗上人は、光圀の生母久昌院の菩提のために建立された久昌寺（日蓮宗）の院代をつとめ、久昌寺附属の十坊の頭に摩訶庵の庵主をもつとめていたのであった。

さて日乗上人は、元禄四年七月十五日の日記に、光圀公の思いがけぬ御成について、つぎのように記している。

十五日 戌 晴

朝課出仕、勤行如毎時、普門三返如例、壽量品諸齋廻向。日出る

比より牌堂へ上りて諸靈へ備儀誦経ス。辰ノ上ノ比賣門公御成とて人あわたゞしくはしり来る。牌堂ニ而誦経しいたれど立ちかへりて、きのふかも幾右衛門にといしに御成の事もさたなくありしが、十三日に法事のしな御尋ありしほどに、心にかけよなど申されしばかりにて、夕べもおとせざりしにいかにぞや。いざ御成とてはしりかへるに、はや裏門へ御入ありて、庵へ先づゆかめと仰せられしを、ゆめのやうに覚へてあしをそらにして庵に入奉る。

座敷のかざり方つねのさまのおもてなしにありける有様いと心ぐるし。水やあると尋ねられしに、うつはの用意さへなく、あちこちたづねて、やうく□□を上奉るに、御煙草あげよといへど、したゝめおかでやゝ久しくしてぞもて来る。かねてやういあるべき事もひ知り侍るぞや。しかれどいつより御機嫌のめでたくわたらせ給ひて、御そばちかく召して物仰せられし。御物かたりやゝ久しくありし。義海事申出しに、その法師めせとてめさる。縁のことおもひもよらで、やうく御前に参るに、遠くより来りて此山につとめる侍らん心ざし、よろこび思召などいろくあさからず御言葉給る。まことに此山に久しくつとめたる人たちもかやうの事なし。きゝつたへていかにうら山しく侍らんと覚へし。

法事間ある事、御待遠にやあらんと申上るに、いさゝかもいそぐ事なかれ、御物かたりあらんずるぞと仰らる。よろづに付てかたじけなき御よそおひども書付がたし。(後略)(同上「日乗上人日記」八一べ)

上人の右のような叙述によって、光圀公の人柄・言動がいきいきと具象化されている。西山荘における光圀公と院代・庵主としての日乗上人との、清らかであたたかい心の交流は、上人の日記の主軸

をなしているのとみてもよい。

——以上は、篤実な日乗上人の「日記」に、当時の言語生活の鉤脈を見いだすためにおこなった一つの試掘作業である。

(昭和42年3月28日稿)

——広島大学教授——